

# 人体の仕組みを究め 新たな薬物を求める

## 蘭方医学と解剖書

江戸幕府は、漢方医学よりも西洋医学の方が外科の分野では優れていたため、鎖国の間でも医薬書の輸入を認めていました。

蘭方医学を学ぶ医師は、人体の構造に関する正しい知識が必要と考え、解剖書を読むだけでなく、実際に解剖することが必要であると考えました。

日本で最初の人体解剖が記録されたのは宝暦4年(1754)のことであり、幕府の許可を得てこの解剖に立ち会ったのは、古方派の医師・山脇東洋で、この解剖の観察結果を『蔵志』として出版し、当時信じられていた中国医学の人体に関する考え方である「五臓六腑説」に誤りがあることを指摘しました。

蘭方医・杉田玄白は前野良沢、中川淳庵とともに刑死体の解剖に立ち会いました。杉田玄白らは、解剖の結果が持参していた西洋の解剖書と同じであることに驚き、安永3年(1774)に「ターヘル・アナトミア」を翻訳して『解体新書』を出版しました。

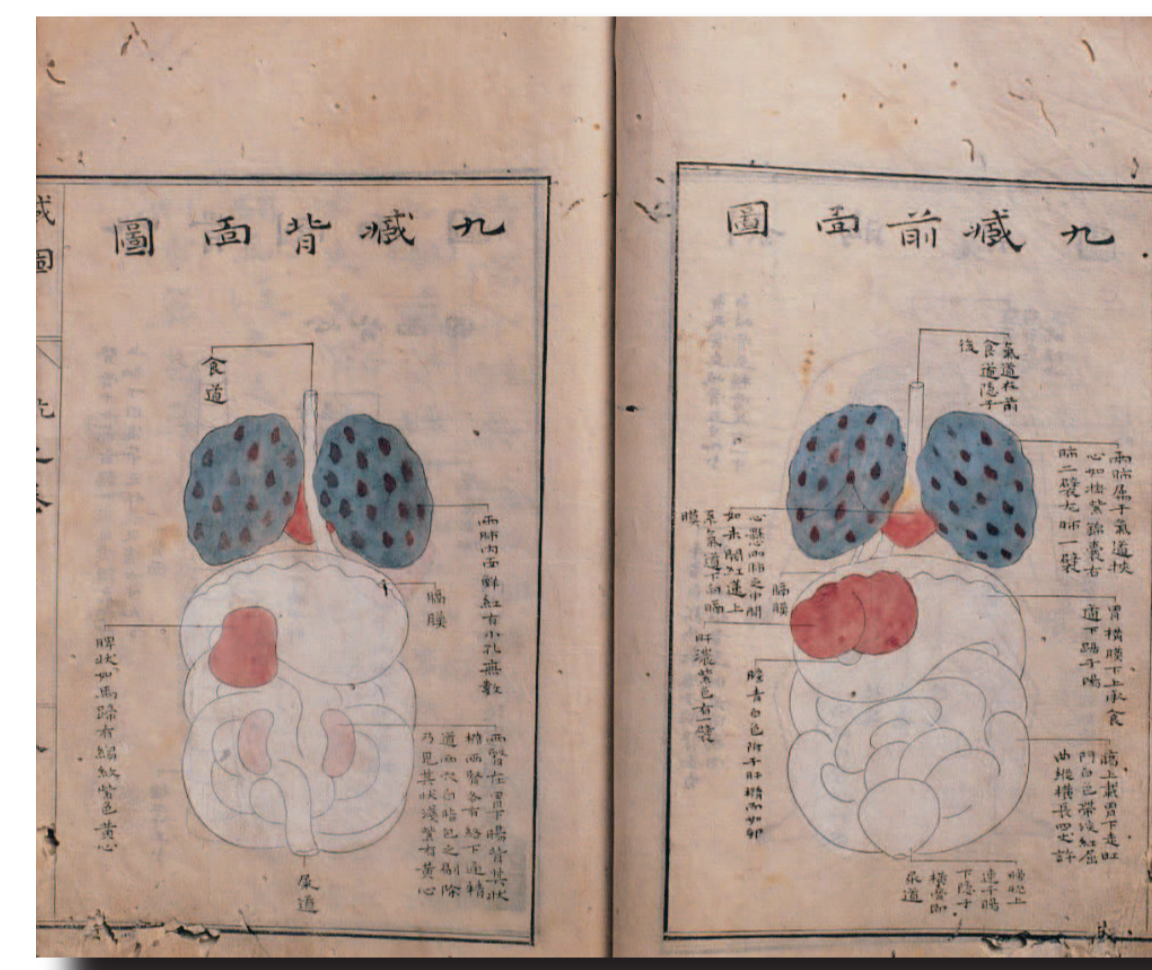
## 蘭方医学と薬物

オランダ船は蘭方医学とともに、それまで日本では知られていなかった薬物を運んできました。蘭方医学を学ぶ医師が増えると、新しい薬物への期待も高まりました。しかし実用にあたっては、西洋の薬物と日本の薬物の同定(=同じものかどうか比較して確認すること)が必要となり、次第に西洋の薬物の研究が盛んになりました。また、輸入した薬物は高価であるため、国産の薬物で代用できるものを探して用いました。

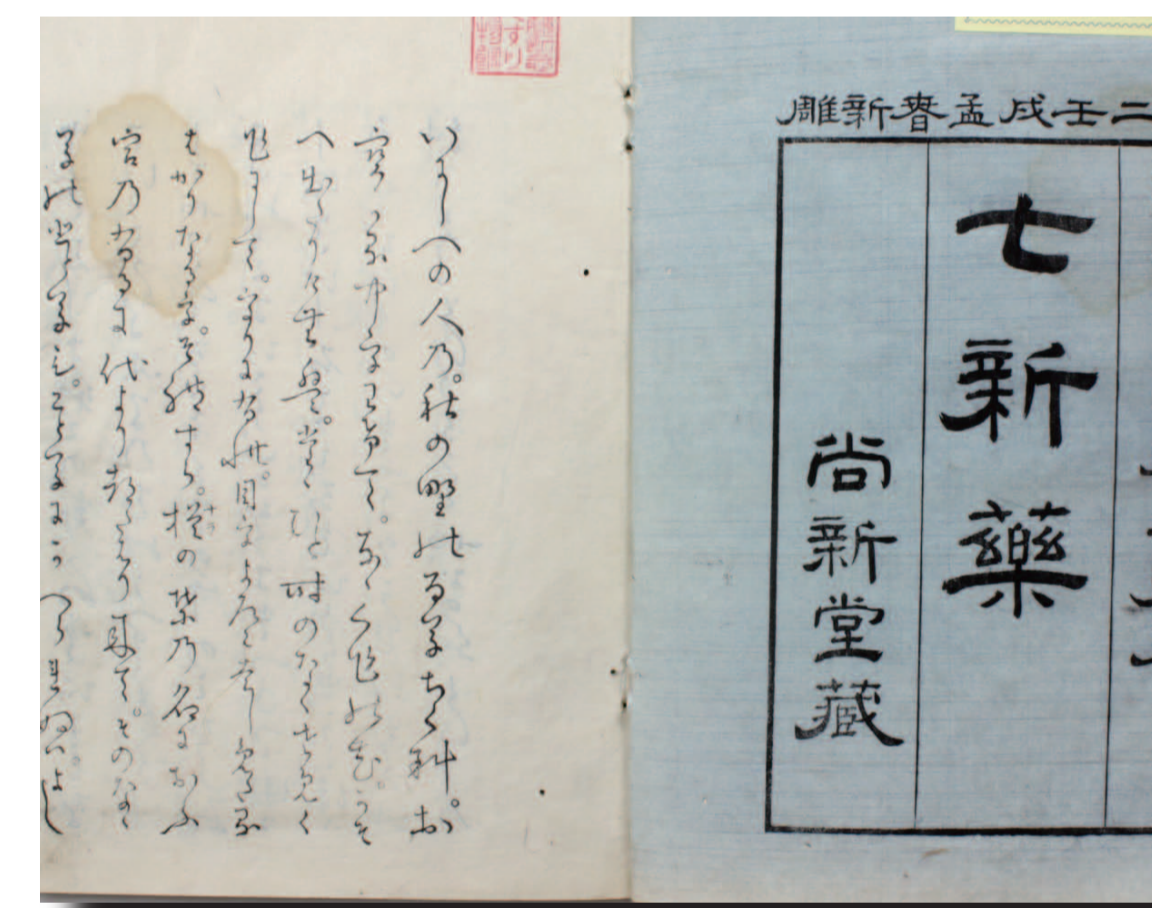
明治時代に西洋医学が主流になると、粗悪な薬品が輸入されたり、あるいは国内で製造が始まった薬品の品質にばらつきがあるなど、さまざまな問題が起きました。そのためヨーロッパにならって薬局方の制定が必要となりました。薬局方はその国で使用する薬品の品質の基準などを定めた重要な法令で、『日本薬局方』は明治19年(1886)に発布されました。



『(覆載)万安方』  
鎌倉時代の書物で、五臓六腑や経絡図が書かれている。



『蔵志』  
山脇東洋が観臓(内臓を観察すること)を行って、人体の構造を紹介した書物。



『七新薬』  
当時知られていなかったキニーネなど7種類の薬物を紹介した書物。



『日本薬局方』第一版とラテン語版わが国最初の医薬品公定書。